

色の表示・伝達の方法

色のコミュニケーション(色を的確に伝えるために)

赤や黄色、緑、ベージュ、グレーと色を言葉で表しても、相手に自分の思う色が正しく伝わることは、まずありません。

一般的に“赤”といっても、

- 鮮やかな赤、 ● 暗い赤
- じみな赤、 ● 明るい赤

などこれ以外にもたくさんあります。ですから色を正確に伝えるためには、言葉だけでなく、必ず“色票(色見本)”や“マンセル値”を用いて表します。

マンセル値(表色系)では、色は色相、明度、彩度の3つで表されます。3つすべてを持っているものを有彩色、色あいがなく、明度だけ持っているものを無彩色(N:Neutral)といいます。

【色相】……色あい、色味の違い(Hue)。とは

- 赤(R)・黄赤(YR)
- 黄(Y)・黄緑(GY)
- 緑(G)・青緑(BG)
- 青(B)・青紫(PB)
- 紫(P)・赤紫(RP)

*記号はアルファベット読みです。

の10色相が等間隔に配列され、右上の図の「色相環(色あい)」のように、連続した円環になります。


【明度】……明るさの度合(Value)。明度0で表される理想の黒から、明度10の理想の白までの間を等間隔に10に分割されます。実際に使う色は、1~9.5の範囲で表されています。

【彩度】……色の鮮やかさの度合。色味を持たない彩度0の無彩色(白・黒・グレーなどの色)から、各色相の純色に向かい鮮やかさにしたがって、数値化されています。


マンセル値の「書き方」と「読み方」

色相、明度、彩度の順で表記します。

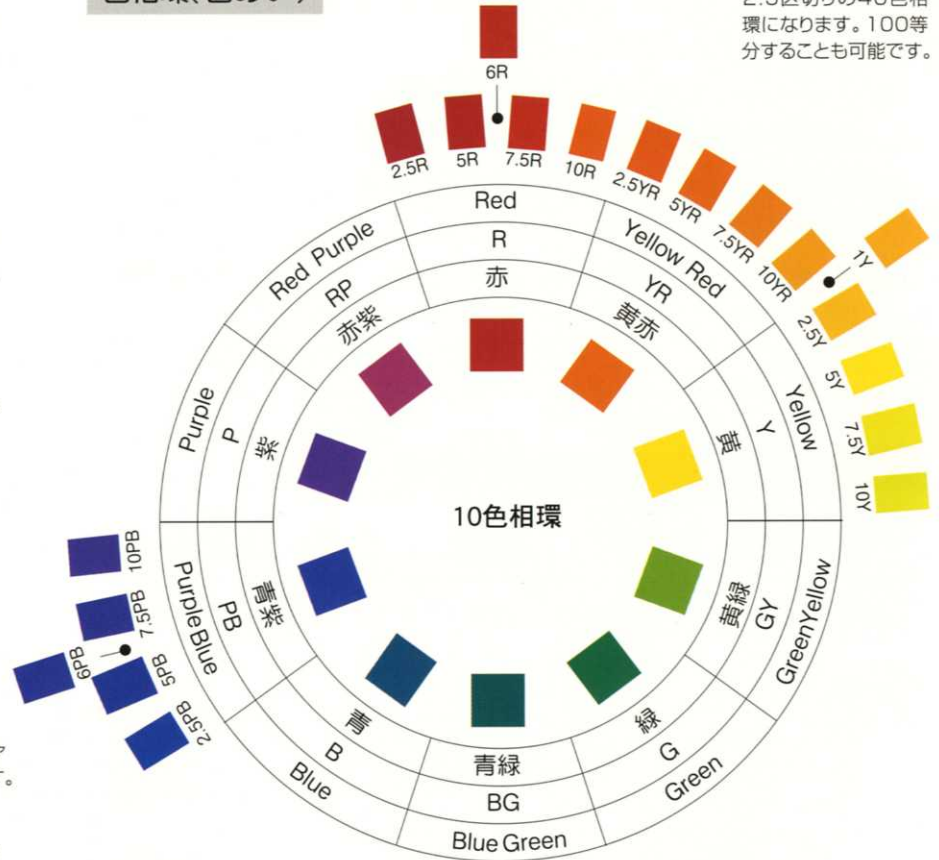
この鮮やかな赤は…

色相 明度 彩度
 5R 4/16
 ゴール ヨンのジュウロク

このおだやかなベージュは…

 10YR 7/1.5
 ジュウワイール ナナのイチテンゴ

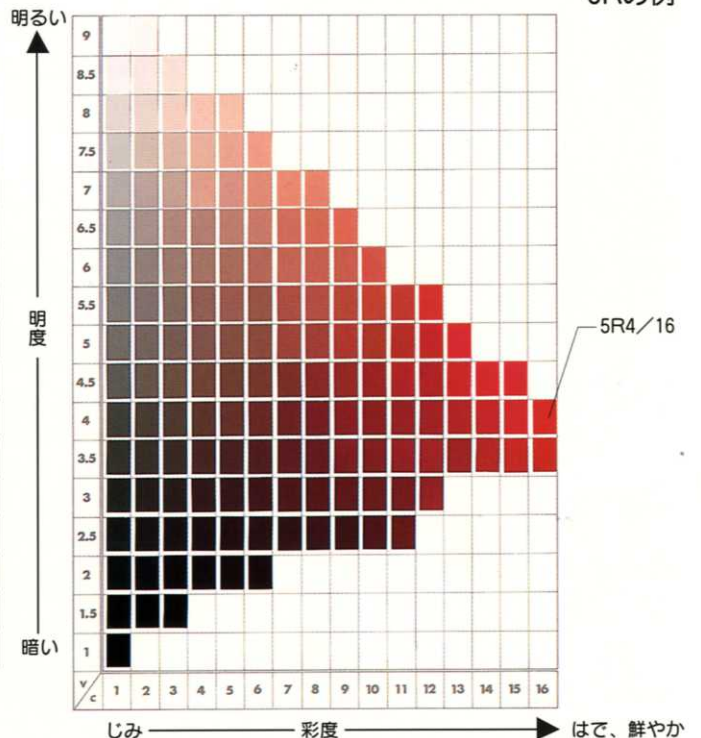
色相環(色あい)



無彩色

- 白 N9.5
- ラ N9
- イト N8.5
- グレイ N8
- レ N7.5
- N7
- N6.5
- ミ N6
- ディア N5.5
- ム N5
- グレイ N4.5
- レ N4
- ター N3.5
- ク N3
- グレイ N2.5
- レ N2
- N1.5
- 黒 N1

色相面(5Rの等色相面)

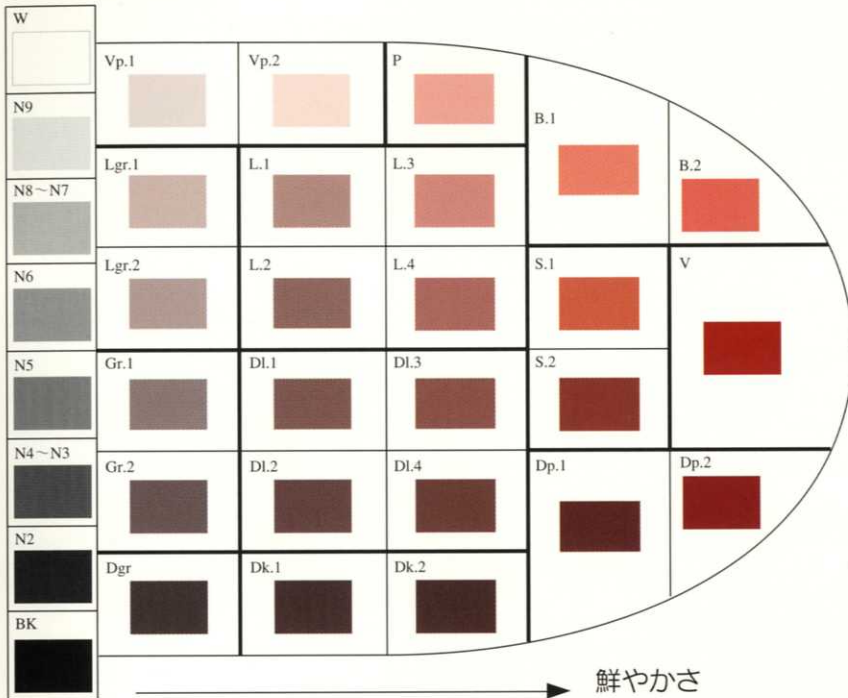


■用語解説

・マンセル値(表色系)

アメリカ人のマンセルによって考案された表色法。色を色相、明度、彩度の3属性によって整理分類したもの。色票として、マンセルブック(Munsell Book of Color)や「標準色票」JISなどがあります。

トーン図(5R)



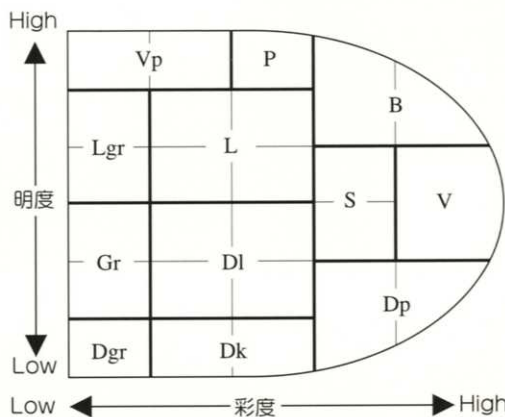
トーン(Tone:色調)

左のトーン図(5R)のように同じ色あいの色ここでは“赤”でも明るさ(明度)と色の鮮やかさ(彩度)が違っていると、色は心理的にも異なって見えてきます。この印象を心理的に区分けしたものをトーンといいます。

この印象を大別すると下の表のように“はで”“あかるい”“じみ”“くらい”の4つのイメージになり、色の基本的なイメージを伝えるのに役立ちます。

さらに、この4トーンを細かく区分すると左下図の太線枠内のように12のトーンになります。

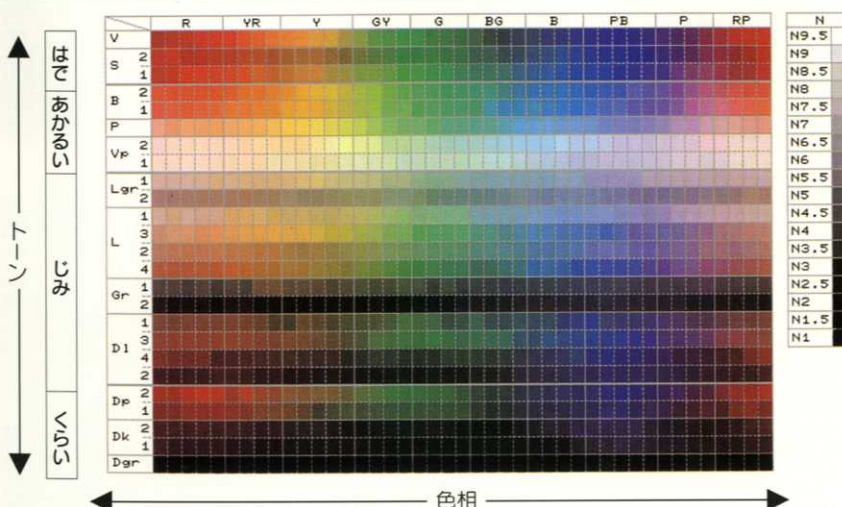
この冊子では、トーン(色調)を把握しやすいように12トーンで記述しています。(色彩調査や色彩計画では、左図のようにさらに細かい25トーンを使用します。)



トーンの記号(12トーン)

4トーンイメージ	記号	読み	意味	
はで	V	Vivid	ビビッド	あざやか つよい
	S	Strong	ストロング	
あかるい	B	Bright	ブライツペール	あかるい あわい ごくあわい
	P	Pale	ペール	
	Vp	Very Pale	ベリーペール	
じみ	Lgr	Light Grayish	ライトグレイッシュ	明るい灰みの よわい 灰みの にぶい
	L	Light	ライト	
	Gr	Grayish	グレイッシュ	
	Dl	Dull	ダル	
くらい	Dp	Deep	ディープ	こい くらい 暗い灰みの
	Dk	Dark	ダーク	
	Dgr	Dark Grayish	ダークグレイッシュ	

色相とトーン(Hue & Toneスケール)



ヒュー・アンド・トーン(Hue&Tone)スケール

Hue&Toneスケールは、カラーデータの出現パターンの把握を容易にするため、色相とトーンによる2次元の平面上に色を分類整理する仕組みです。

有彩色は、10色相を4分割した40色相に慣用的に多く使われる3色相(6R,1Y,6PB)を加えた43色相と25トーン区分によって構成されています。そこに無彩色18色を加えた1093色のカラースケールです。

参考文献:「カラーシステム」小林重順 著 講談社

望ましい景観色彩とは

1. 自然環境に配慮した色彩

豊かな自然が豊富に残されている青森県では、その景観が観光資源となっているばかりでなく、県民のみなさまに対して実施したアンケート調査結果からも、地元の自然景観保全の要請はきわめて強いという結果になりました。

本ガイドプランでは、自然景観と調和する色彩を第一に考え、県の自然環境に合った色彩の使い方を提案しています。そのポイントは、以下の3点にまとめられます。

- ①ブナ林やヒバ林などに代表される青森県の植生の景観と調和する色彩の奨励。
- ②自然性の高い海岸線や湖沼の景観と調和する色彩の奨励。
- ③農村集落や漁村集落、あるいは開発が進む郊外において、その環境を保全し、景観の質を高めるような色彩の奨励。



2. 各地域の固有性の尊重

景観色彩ガイドプランのもうひとつの目的は、地域の歴史や独自性を尊重、再認識し、推奨色として生かしていくことにあります。

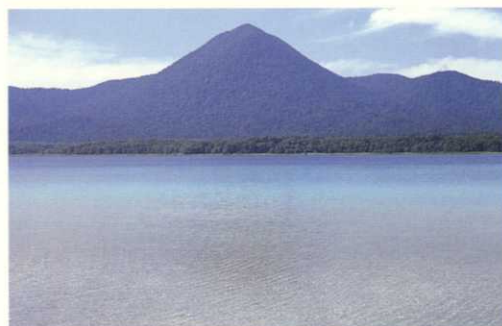
建材や仕上げ材の工業化・量産化が進んだ現代では、経済効率や機能効率のみを追及して設計を行うと、画一的で地域性の希薄な町並ができ上がってしまいます。

本ガイドプランでは、各地域の色彩を調査し、地域に固有に見られる伝統色や特有の色使いを「エリアカラー」としてとらえ、地域別の推奨色範囲に反映させています。また、住民意識調査から大切にしたい景観、地域に求めるイメージを調査し、推奨色範囲に反映させています。



3. 心理的に快適な色彩

景観の色は、たくさんの自然物や人工物の色が組み合わさって構成されています。その色の見え方は、対象物を見る距離の遠近や気象条件によっても変化します。色を組み合わせる場合にも、統一によって生まれる美しさ、対比によって生まれる美しさ、面積比のちがいによって感じる色の効果の違いがあります。景観材では、下地や仕上げの素材感によっても色の感じ方は異なります。こうした色彩心理の研究を応用、活用しながら、心理的にこころよく、望ましい景観を形成する色彩の使い方を提案しています。

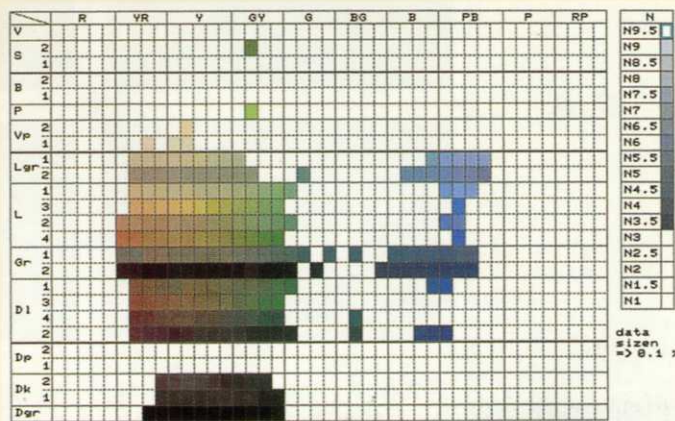


■ 現況調査で作成した資料事例

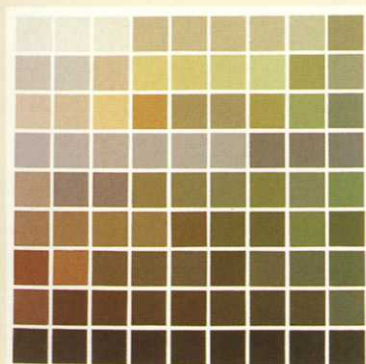
植生の葉や幹、土、砂、岩、石、空、水面など自然環境色を測色し分析すると、分布の集中する範囲が分かります。植生の中心は、色相ではYR系、Y系、GY系で、トーンではLightトーンやGrayishtーン、Dullトーンなどのおだやかでおちついた範囲です。土や砂はYR系、Y系のGrayishtーンやDullトーンで、やはりおちついたトーンです。

色相ではP系やRP系、トーンでは極端に明るいトーンや彩度の強いはでなトーンは少ないといえます。

■ 青森県の自然色 (植生、土、砂、岩、水面など)

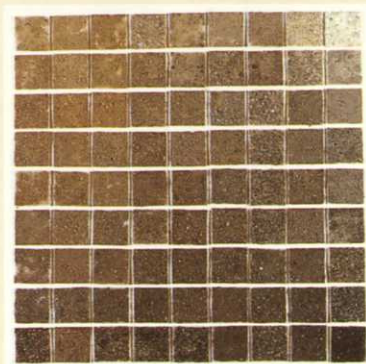


植生のカラーサンプル



測色した植生の色の变化を色票で示しています。

土のサンプル



県内で収集した土のサンプルです。グレイッシュな褐色系が基調です。

海岸の砂、岩のサンプル



土に比べ、海岸線の砂や岩の色は比較的变化に富んでいます。

景観色彩のとらえ方

1. 色彩の評価・検討の基本要件

- ① 景観色彩では公共性を配慮し、建造物の目的や用途、周辺環境との関係において、適切な使い方を検討することが必要です。
- ② 景観は、自然物と人工物から構成されます。建造物や工作物など人工物の色のコントロールが本プランの目的です。
- ③ 景観は地域住民に親しまれた色、飽きの来ない色で整えることが必要です。色彩が整えられた地域は次世代に引き継ぐべき県民の財産となります。

2. 色彩計画時の距離的条件

景観色彩を計画する場合、視点場(P.9参照)の距離によって見え方が異なる点に注意してください。

	遠景 (ランドスケープ・レベル)	中景 (タウンスケープ・レベル)	近景 (ストリートスケープ・レベル)
事例			
			
代表的な視点場と対象物までの距離	展望台、高いビル、山中やスキー場からの眺望、海岸沿いの道路や車窓からの眺望 約1km以上	幹線道路からの市街や集落の眺望、農道や海岸線の眺望 約200m～500m以上	繁華街や住宅地、集落の道路、対象物の近隣の道路 約100m以下
ポイントと見え方の特徴	輝度対比※を少なくする ・一般的な大きさの建造物は点や点の集合体に見えます。 ・大気や気象条件によって見え方の変化が大きく、遠方は水蒸気やちりで霞んでグレーがかって見えます。 ・色相の違いよりも明るさや反射が視認され、光沢のある外装は晴天時に反射光を放ちます。	基調色に配慮する ・町並や集落の色全体が視認され、個々の色彩や相互の関連性、差異が認識されます。 ・植生のおおまかな種類や、田畑の作物の種類や様子もだいたい見分けられる距離です。 ・個々の建造物ばかりでなく、部位別の色の違いもわかるので、色の選定には重要な距離となります。	配色の細部を配慮する ・個々の建造物の部材別の色の違いや素材感、凹凸感が視認されます。 ・中景、遠景と比較して、隣の建造物や道路の路面との関係、市街では、ファサード(入口のある正面)が重要になってきます。 ・光の当たり方による色の見え方の違いが現れる距離です。

※ある対象物を見ているときに、その対象物が出す光の強さを数値で表したものです。明度の高い色、反射性の高い仕上げ材を使うと、背景の対比が強くなり、建造物が浮き立ったように見えます。

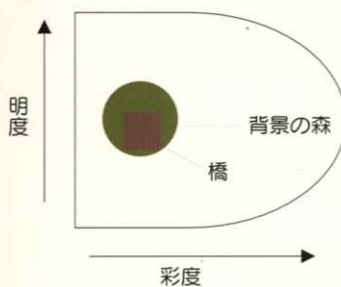
3.背景との対比関係

環境に対する色の見え方は、背景（地）と対象物（図）とのトーンの関係が非常に重要です。背景に対する見え方の度合いを大きく分けると、以下の3タイプに分類されます。事例に示した景観の色をトーン図で説明します。

同一トーン（同化）

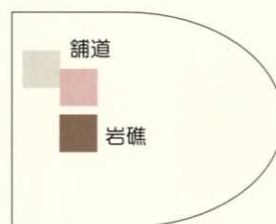
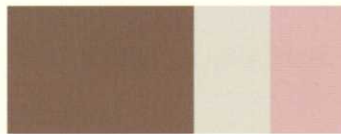


トーン図での位置



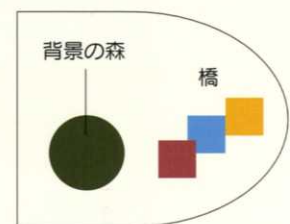
環境に溶け込ませてしまう方法です。環境を主体におき対象物をなるべく目立たせないようにする方法です。

類似トーン（類似化）



環境のトーンに近い色を使い、適度な存在感を感じさせる方法です。色相の類似性も必要です。

離れたトーン（対比化）



対象物をきわだたせ、目立たせる方法です。ポイント効果をねらった橋りょうなどの色彩に使われますが、注意深い計画が必要です。

4.「視点場」とは

視点場とは、対象とする建造物を見ることができる場所の中から、景観設計のために選ばれた場所をさします。色彩の検討や選定のためには、いくつかの視点場を選定する必要があります。その数については厳密な規定はありませんが、「もっともたくさんの人が頻繁に対象物を目にしやすい場所」が代表的な視点場にふさわしいといえます。

視点場から撮影した写真やスケッチ、パースなどは色彩を検討する基本的な資料になります。

